



巻 頭 言

飢 餓 は 来 な い か ？

日産化学工業株式会社 農薬事業部長 早川 充

「中学入学以来、50周年になるので、この秋に地元で盛大に同級会をやる。勤労働員と一緒にだった女学生も参加するので是非出て来い。」という葉書が舞い込んだ。

我々の入学は太平洋戦争が始った年であり、急速に戦時色が強まっていった時であった。出征兵士のいる農家の手伝いということで、毎年春、秋、それぞれ一週間位、農村に麦刈、田植、そして稲刈脱穀と勤労奉仕に出掛けた。昼食に農家で出して呉れる純米のお握りは、天下の美味であったが、腰を曲げての長時間作業は何んともつらい仕事であった。

あれから50年近くが経つわけであるが、農業の機械化、省力化は随分進んだものである。資料によると、これらの作業は、1949年で10a当たりそれぞれ35～70時間位かかっているが、40年後にはその1/5～1/10になっている。

除草作業は、伸び盛りの身体には無理があるとされたのか、幸いにして奉仕作業でやることはなかったが、前記の様に比較すると50時間余かかっていたものが、除草剤の発達と普及によって3時間を切るまでになっている。

これ丈省力化されても、農作業は重労働であり、且つ一部の例外を除いて報酬が多いとは言えず、農業継承者の減少、高冷化は進む一方である。1989年には新卒の農業就業者は2,000人、一方65才以上の農業従事者は29%に達しているという。

先日、NHK教育テレビ「地球環境と農業」なるフォーラムがあった。冒頭、メンバーの一人から、ワールド・ウォッチ研究所のW. ブラウン博士の問題提起の紹介があった。「米国では毎年、240億トンの農地表土が風蝕されてお

り、カリフォルニア中心に水不足傾向も強まっている。

車及び工場の排ガスによる大気汚染で、5～10%の作物の減収が見られている。早魃は中東、中国でも進行しつつある。一方、現在、約54億の世界人口は、毎年9千万人増え、100～120億までは増える。これをどう考え、どう対処すべきか」ということであった様に思う。しかし議論は、地球レベルから日本に移り、「環境に優しい農業」となり、お定りの有機農業礼讃、化学肥料、農薬を出来るだけ使わない農業、となって、スケールの大きい議論を期待しただけに失望を禁じ得なかった。

確かに我々は飽食の時代において、飢餓など殆んど意識にないのが事実であろうが、ブラウン博士の指摘する問題点や、中東油田の大火災、ピナトゥボ山の大噴火の影響等も考えると、何時迄も、現在の様に食糧の供給状態が安定しているかどうか保証はないわけである。更に我が国の農業を思う時、農水省の「2000年農産物長期見通し」通りに国内生産が続け得るものか、心もとない気持ちになってしまう。

こうした思いの中で最近読んだ大内力氏の「農業の基本的価値」は示唆に富んでおり感銘深かった。農産物の自由貿易が何如に地球環境を破壊するか、を歴史的に考察し、又農林業保護こそ、その防止に肝要であること、現在の食糧過剰も不均衡と不平等に由来するものである、と指摘されている。

当り前のことであるが、我が国の農業は絶体を守らねばならず、作物保護の重要性は増し、農薬の価値も、安全性も、更めて見なおされる日が来るに違いないと信じた。